



TITLE:

相互レビューを中心とした申請書 ブラッシュアップワークショップ の取り組み

AUTHOR(S):

菅井, 佳宣; 大西, 将徳; 田上, 款; 加賀田, 博司

CITATION:

菅井, 佳宣 ...[et al]. 相互レビューを中心とした申請書ブラッシュアップ
ワークショップの取り組み. 2019: P3-2.

ISSUE DATE:

2019-09-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/244472>

RIGHT:

相互レビューを中心とした 申請書ブラッシュアップワークショップの取り組み

○菅井 佳宣、大西 将徳、田上 款、加賀田 博司（京都大学 学術研究支援室）

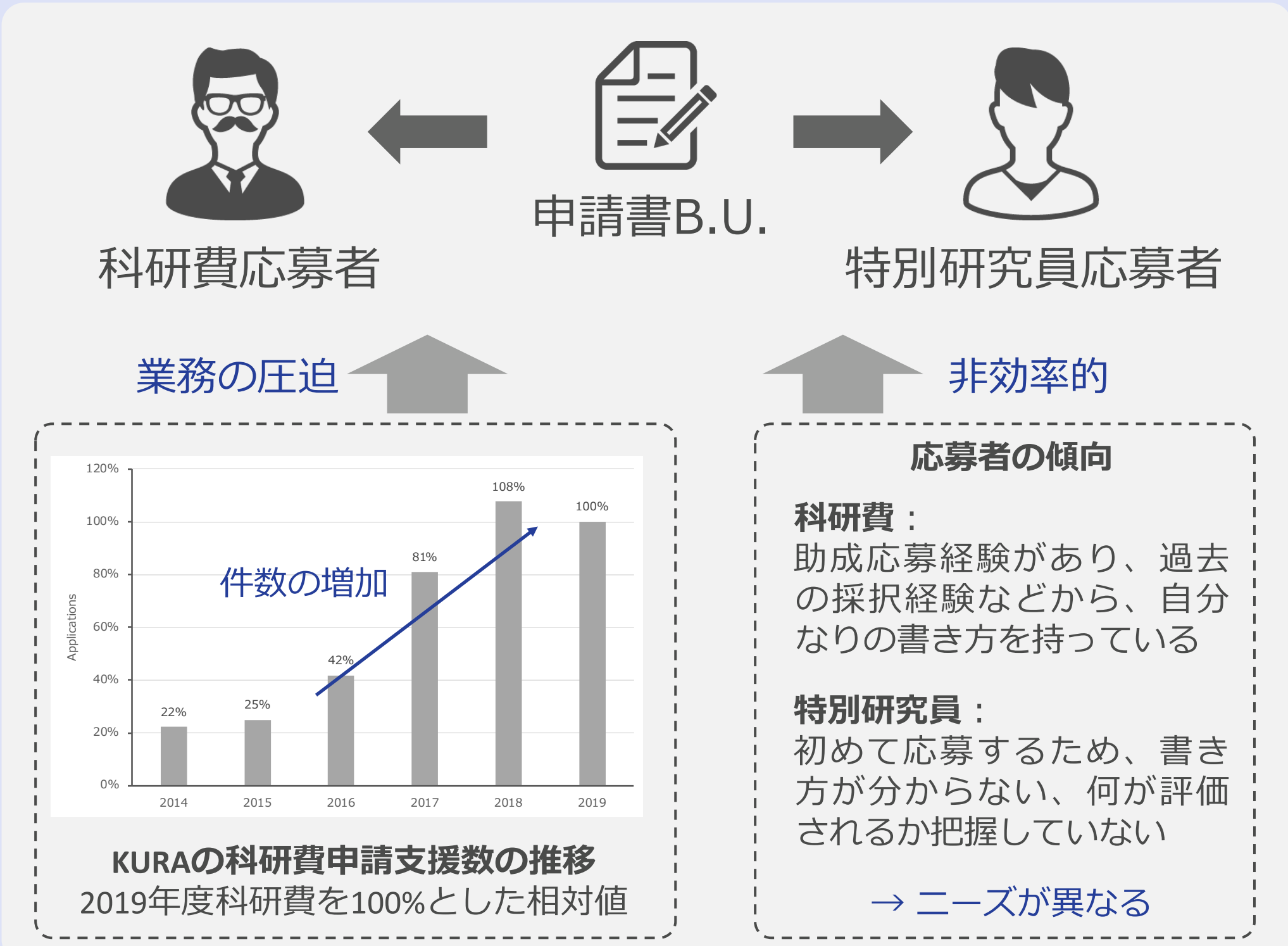
◆ 背景・目的

日本学術振興会が実施する科研費や特別研究員制度は、規模や対象の広さから大学における研究活動を支える重要な事業である。そのため、科研費申請支援はURA業務の中でも重要な位置を占めており、各大学において様々な取り組みが行われている。

京都大学 学術研究支援室（KURA）では、申請書ブラッシュアップ（B.U.）を中心に様々な申請支援を行っている。しかしながらB.U.支援数が増加したことで、支援の質の低下や他の業務の圧迫が懸念される状況となっている。また、特別研究員応募者など応募経験の浅い研究者へのB.U.支援は非効率的なケースが多いという問題があった。

そこでKURAの工学研究科担当チームでは、上記問題の解決を目的に支援対象者の申請書相互レビューを行うワークショップを実施した。

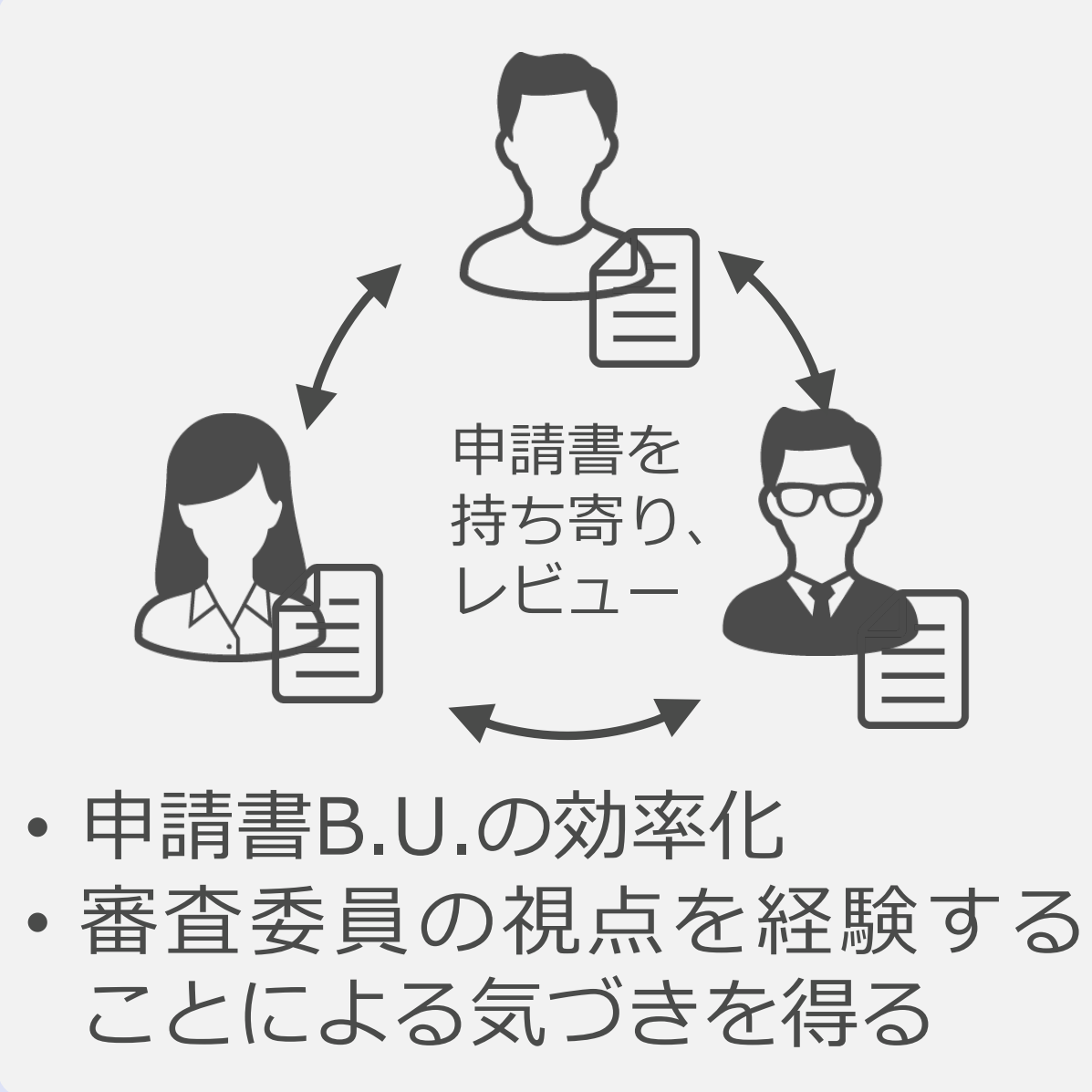
- 科研費申請支援メニュー例
- ・公募要領等説明会
 - ・書き方説明会
 - ・審査委員・採択経験者談
 - ・書き方のノウハウを纏めたハンドブックの作成
 - ・申請相談
 - ・申請書B.U.



◆ 方法① [2018年度申請支援]

特別研究員と科研費（2回）の応募者を対象に、相互レビューを含むワークショップを実施

1. 参加者は自身の申請書を持参
2. 申請書の書き方のポイントを説明
3. 2～3人一組のグループに別れ、互いの申請書を読む（各20分）
4. 実際の評定要素等に対応したコメント表に評価を記入
5. 評価のフィードバックとディスカッション（URAがファシリテート）
6. URAが申請書をB.U.



◆ 結果①

	学振 特別研究員	科研費①	科研費②
対象者 (工学研究科)	修士2年～研究員	若手研究者	
参加者	23名	3名	2名
カバー率 (分母は応募者数)	18.5%	2.0%	
採択率(%)の向上 (京大全校との比較)	約17ポイント向上	約10ポイント向上	
アンケート満足度 (大変役に立った、どちらかと言えば役に立った、あまり役に立たなかった、役に立たなかった、どちらとも言えない)	大変役に立った(12)と、 どちらかと言えば役に立った(8) を合せて100% (無回答が3件)	大変役に立った(4) が100% (無回答が1件)	
URA一人が担当できる参加者数	最大6名		

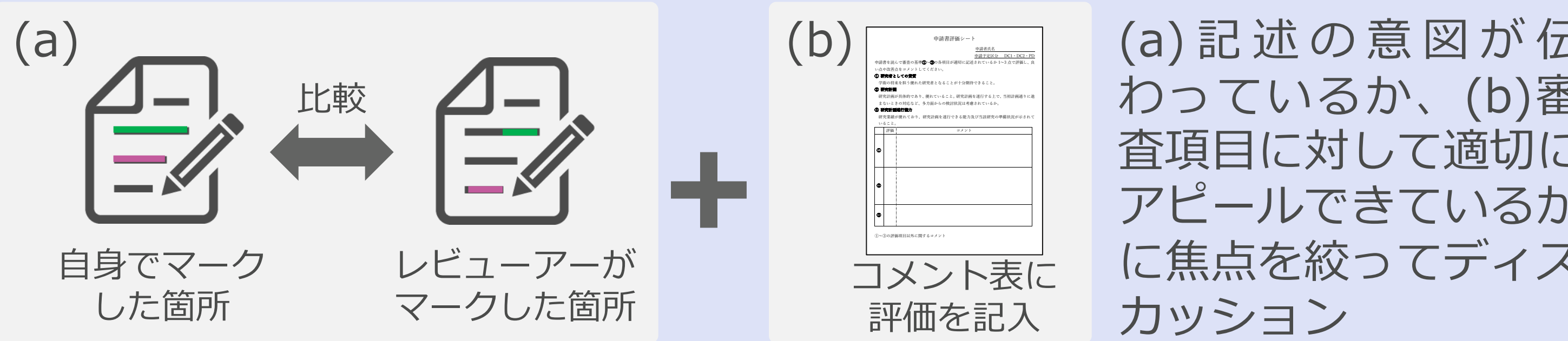
- 特別研究員対象ワークショップには20名を超える参加者があった。
- 各グループの議論を収束させるために、一人のURAが最大でも2グループしか受け持てなかった。

URAのファシリテーションが必須のため、規模の拡大が難しかった

◆ 方法② [2019年度申請支援]

ファシリテーションが無くても議論の焦点が絞れるよう方法①の3～5.を変更 ※1,2,6は方法①と同様

- ②-i. 自分の申請書に「研究の目的」「研究の独創性」を記述した箇所をそれぞれマーク
- ②-ii. 互いの申請書を読む（各20分）
- ②-iii. レビューアーとして「研究の目的」「研究の独創性」が記述されていると感じた箇所をマーク(a)
- ②-iv. 実際の評定要素等に対応したコメント表に評価とコメントを記入(b)



◆ 結果②

	学振 特別研究員
対象者 (工学研究科)	修士2年～研究員
参加者	18名
カバー率 (分母は応募者数)	14.4%
アンケートコメント	・相互レビューにより、申請書の読みやすさ、わかりやすさがいかに重要かを再確認でき、とても有意義だった。 ・URAからの評価（コメント）も採点形式にしてほしい。
URA一人が担当できる参加者数	18名（準備、片付けを除く）

- 審査上重要な項目に絞った相互レビューの進行に成功した。
- URAのファシリテーションが比較的要求されないため、規模拡大のモデルとなることが期待された。

◆ まとめと今後の課題

- ・ 特別研究員と科研費の申請者を対象に、4回ワークショップを開催した。合計で46名が参加し（特別研究員：41名、科研費5名）、ワークショップの進行の効率化も進んだ。
- ・ アンケートによる参加者の満足度は高く、さらに特別研究員応募者は参加者の採択率が高かった（2018年度申請支援）。

- ・ 参加者の守秘意識については注意が必要である。特別研究員応募者には守秘義務の意識付けが必要と考えられる。一方で、科研費対象の参加者が少なかった原因の一つに、情報漏えいへの懸念があると予想される。
- ・ 方法②の効果を検証するとともに、これをベースに2019年度秋の科研費申請支援で全学対象のワークショップを実施する。